

## [研究論文]

### 1840年代のウィーンにおけるポプリとカドリーユの関連： バルフの《ハイモンの4人の息子たち》に関する考察

鍵山 由美

#### 1. はじめに

筆者は、ヨハン・シュトラウス1世 Johann Strauss Vater(1804-49)の引用作品に関する研究を続けている。その一環として、本研究ではバルフ Michael William Balfe(1808-70)のオペラ《ハイモンの4人の息子たち *Die vier Haimonskinder*》に基づく引用作品を取り上げ、オペラと引用作品の関係、ならびにその様式を考察したい。本論では、シュトラウス1世の作品だけでなく、同じオペラのナンバーを多数編曲・出版したディアベッリ Anton Diabelli (1781-1858)の作品にも焦点をあてる。両者の作曲手法や様式の比較から19世紀の引用作品の成立事情を探るとともに、「ポプリ Potpourri」と呼ばれるとジャンルの多様性・流動性についても考察していくつもりである。

#### 2. バルフによる《ハイモンの4人の息子たち》の成立とウィーン上演の背景

アイルランド生まれのバルフは、1835年までにロンドンで人気作曲家としての地位を確立したが、劇場経営の失敗により、パリで再起を期す決意をする。フランスに渡った正確な日付は判明していないが、1841年3月9日にロンドンのライシウム劇場で初演した *Kéolanthé, or The Unearthly Bride* が失敗に終わって以降のことである。そして、1840年代半ばまでパリでの活動を続けた。《ハイモンの4人の息子たち》(以下、《ハイモン》と略記)は、Adolphe de Leuven (1803-56)と Brunswick(1805-59)の台本によるパリ時代のオペラ・コミックであり、原題は *Les quatre fils Aymon* である。パリのオペラ・コミック座で1844年7月15日に初演された。物語の題材は、古いフランスの伝承に由来し、フランク王国のカール大帝の時代が舞台設定である。ドルドーネ伯ハイモンの4人の息子とその愛馬の運命を扱っている。しかし、この作品はパリではあまりヒットせず、17回しか上演されなかった<sup>1)</sup>。

一方、ウィーンでは、1844年12月14日にヨーゼフシュタット劇場で、Joseph Kupelwieserの独訳台本により *Die vier Haimonskinder* として初演された。バルフの作品は、それまで演奏会において聞かれることはあっても、劇場で劇作品が上演されたことはウィーンではなかった。翌年「5月に、前のシーズンの損失を埋め合わせるために、この作品の再演計画が新たに練られた。これは作品の大成功を証明するもの」である(SCHÖNHERR 1954: 256)。さらに、1845年にはヨーゼフシュタット劇場だけでなく、アン・デア・ウィーン劇場でも9月24日から同じ演目が舞台上に掛かれ、ケルンテン門脇の宮廷劇場ではJosef von Seyfriedによる別の独訳台本を用いたヴァージョンを、9月27日から上演した。宮廷劇場版の題名は *Die vier Haimons-Söhne* に変更された<sup>2)</sup>。3つの劇場の競演により、1844年末から1845年にかけてのウィーンでは、「ハイモン旋風」が吹き荒れた。

ちなみに、《ハイモン》の大成功を受け、バルフの他作品の上演計画も進められた。その結果、1845年11月には《愛の泉 *Der Liebesbrunnen*》、1846年には《ジプシー娘 *Die Zigeunerin*》と《ロシエルの包囲 *Die Belagerung von Rochelles*》が立て続けにウィーンで初演されたが、1848年の3月革命までに《ハイモン》ほどの大成功を収めた作品はなく、バルフの代表作《ジプシー娘》でさえ、「31回上演されたにすぎなかった」(MAILER 1999: 360)。

### 3. ヨハン・シュトラウス1世によるカドリーユ

ヨーゼフシュタット劇場での《ハイモン》の成功に乗じて、ヨハン・シュトラウス1世は、1845年1月19日に王宮内のレドゥーテンザールで開催された「ウィーン楽友協会 *Gesellschaft der Musikfreud des österreichischen Kaiserstaates*」の舞踏会で、自作の〈オペラ《ハイモンの4人の息子たち》のモチーフに基づくカドリーユ *Quadrille über beliebte Motive aus der Oper "Die vier Haimonskinder"*〉(以下、〈ハイモン・カドリーユ〉と表記)<sup>3)</sup>を発表した。王宮の舞踏会場で開催される舞踏会は、当時もっとも高いランクに位置づけられ、入場者も社交界の重鎮たちであった。

このカドリーユは、初演の4日後にあたる1845年1月23日にハスリンガー *Tobias Haslingers Witwe & Sohn* 社による楽譜広告が *Wiener Zeitung* 紙に掲載され、Op.169として売り出された。この時に発売されたのはピアノ独奏用の楽譜のみであったが、「14日後には第2版が印刷された」ほどの売れ行きをみせた(SCHÖNHERR 1954: 256)。さらに半年後の8月16日には、ピアノ連弾譜、ピアノ伴奏付ヴァイオリン譜、フルート譜(独奏譜とピアノ伴奏譜)、ギター譜、オーケストラ譜、ピアノ簡易版譜が一斉に売り出された。

カドリーユは1840年にウィーンで爆発的人気を呼んだ舞曲であるが、シュトラウス1世の〈ハイモン・カドリーユ〉は、カドリーユを構成する6曲のモチーフすべてがオペラから引用されている<sup>4)</sup>。オペラや器楽曲などの既存曲を引用して新たな楽曲を構成する手法は、19世紀前半に広く用いられた。

1世の作品にみられる引用の手法には、(1)複数の作曲家によるモチーフをつなぎあわせる場合と、(2)楽曲内のすべてのモチーフを1つのオペラ作品から引用している場合がある。後者の手法は、ワルツや行進曲などでは1820年代から使用している手法であるが、カドリーユでこの手法を使用したのは、〈ハイモン・カドリーユ〉が初めてであった<sup>5)</sup>。その後の1840年代には、この種のオペラ・カドリーユが4曲作曲されている<sup>6)</sup>。

それでは次に、オペラ《ハイモン》と〈ハイモン・カドリーユ〉のモチーフの関係を観察することにする。オペラの引用箇所とそれを使用したカドリーユのナンバーとの関連を表1に示す。縦軸に出典となるオペラのナンバー、横軸にカドリーユの6曲を記した。

〈ハイモン・カドリーユ〉では第5曲「パストゥレル *Pastourelle*」でのみ、2つのナンバー

表1: ヨハン・シュトラウス1世による〈ハイモン・カドリーユ〉の引用出典一覧

Balfe: <i>Die vier Haimonskinder</i>		J. Strauss I: <i>Haimonskinder- Quadrille</i>	第1曲			第2曲		第3曲			第4曲		第5曲			第6曲	
			Pantolon(A; C)	Pantolon(B)	Pantolon(D)	Été(A)	Été(B)	Poule(A; C)	Poule(B)	Poule(D)	Trénis(A)	Trénis(B)	Pastourelle(A)	Pastourelle(B; D)	Pastourelle(C)	Finale(A; B)	Finale(C; D)
Akt 1	Arie: Auf! ihr Wachen! habet Achtung!														64	2	
No.1	Quartett: Gott, was seh' ich!										62	38					
No.10	Chor und Duett: Feiert hoch diese Stunde	32 [G/-]	40 [G/-]	32 [G/D]													
No.11	Duett: Mit milden Wort hat sie's verheissen				1 [F/-]	5 [F/-]									41 [A/G]		
No.14	Glocken-Duett: Warum willst du noch länger												96 [A/G]	33 [A/G]			
No.16	Terzett: Einfüllt ist Aller Hoffen						28 [D/-]	84 [D/-]	44 [D/-]								

上段の数字は引用開始の小節数（各ナンバーの冒頭からカウント）；下段は調性を示す。[-]=オペラの調性、/の後ろに各カドリーユの調性を記す。ただし、オペラと同じ調性のは-（ハイフン）で表記した。（作成：鍵山 2007年9月）

のモチーフを用いている。しかし、他の部分では1曲のナンバーにでてくるモチーフに基づいて各々の舞曲が構成されている。この手法は、後年のオペラ・カドリーユと比較すると、単純な引用といえる。後年のオペラ・カドリーユでは、異なるナンバーからのモチーフを組み合わせた作法が増える傾向にある。

オペラのナンバーをカドリーユのどの部分に引用するかには法則性は認められない。オペラの筋立てや進行とは関係なく、アット・ランダムにモチーフが組み込まれている点がオペラ・カドリーユの特徴である。引用に際して、原曲の拍子や調性は適宜変更されている。

譜例1: バルフェ 《ハイモンの4人の息子たち》:No.1”Auf! ihr Wachen! habet Achtung!”

冒頭のヴォーカル・スコア（下記楽譜はA-Wn所蔵のMS.30606-4<sup>o</sup>.39Mus.に基づいて鍵山が作成）

例えば、オペラのNo.1アリア（譜例1参照）は4/4拍子、ト長調であるが、このモチーフを引

用した第6曲「フィナル Finale CおよびD」(第18小節以降の部分)では、同じ音価を保ったまま、カドリーユのフィナルに固有の2/4拍子に拍節を変更し、調性もへ長調に変えている(譜例2参照)。また、No.14二重唱を引用した第5曲では、4/4拍子の音価を半分にして2/4拍子にメロディーを適合させている。

譜例2: ヨハン・シュトラウス1世《ハイモン・カドリーユ》の第6曲冒頭部分  
(出典: HILMAR 1987: 113)



各楽曲の構造を図1に示す。

図1: 《ハイモン・カドリーユ》の構造モデル

<i>Pantalon</i>	A	B Fine	C=A D	DC
<i>Été</i>	A	B Fine	C=B'	DC
<i>Poule</i>	Intro    A	B Fine	C=A D	D <sub>6</sub>
<i>Trénis</i>	A	B Fine	C=B'	DC
<i>Pastourelle</i>	A	B Fine	C D=B	DC
<i>Finale</i>	Intro    A	B=A'    C Fine	D=C'	D <sub>6</sub>

《ハイモン・カドリーユ》は、2/4または6/8拍子の6つの楽曲から成り、各楽曲は8小節のフレ

ーズを3ないし4つ組み合わせて構成されている。いずれも三部形式の構造を有し、通常はダ・カーポ、序奏を持つ第3曲「プレ Poule」と第6曲「フィナル」はダル・セーニョによって演奏回数と演奏時間を調整した。「パンタロン Pantalon」の終止がAの後になっている点が、後年のオペラ・カドリーユの構造とは異なる。後年の楽曲ではCの後に設定されている。

#### 4. ディアベッリによるポプリ

作曲家であるディアベッリは、1818年から57年の引退までウィーンで出版業を営み、編曲も多数手がけた。ディアベッリは楽譜の販売促進のため、声楽曲のための *Philomele für das Pianoforte* や *Philomele für die Gruitarre* などのシリーズを立ち上げ、いろいろな作曲家の楽曲をこの曲集名のもとに次々と出版した。ピアノのための *Philomele* は第1集がロッシニーによる《オテロ》のアリア “Che ascolto?”に始まり、第500集まで出版が続けられた。一方、ギターのための *Philomele* は、第1集がベートーヴェンによるミニヨンの歌 “Kennst du das Land?”に始まり、第377集まで刊行された。彼はこの種の小曲をシリーズ化して出版することで売上を伸ばしていった。

《ハイモン》の関連楽譜をオーストリア国立図書館(A-Wn)で調査したところ、ディアベッリが関係した楽譜が、29点所蔵されていた<sup>9)</sup>。この数は、バルフの他の作品と比べると、きわめて多い<sup>9)</sup>。出版点数の多さは、《ハイモン》が人気を博した証拠である。内訳をみると、オペラのナンバーをピアノ伴奏譜ないしギター伴奏譜として個別販売したものが25点、残りの4点は「ポプリ Potpourri」と題されて出版された楽曲であった。前者のグループには、ピアノ伴奏用の *Philomele für Pianoforte* のシリーズとして出版された6点(第445~446, 448, 450~452集)<sup>10)</sup>、およびギター伴奏用の *Philomele für Gitarre* 7点(第365~371集)が含まれる。これらのシリーズでは、同じナンバーが「ピアノ伴奏用」と「ギター伴奏用」で重複出版されているだけでなく、ピアノ伴奏用の曲集では、声種別と同じ楽曲を販売していたことも判明した。

他方、後者に分類した4点の「ポプリ」の楽譜は、オペラの主要部分をメドレー形式でつないだ楽曲であり、ピアノ2手用に編曲されている。これら4点から明らかなのは、ディアベッリ社がオペラ《ハイモン》の全曲を4曲のポプリに再構成したということである。資料番号 MS13497-qu4<sup>46Mus</sup> の楽譜には、*Vier Potpourris nach Motiven der Oper: Die vier Haimonskinder. Für das Pianoforte allein von A. Diabelli* という表紙が付けられ、4曲のポプリが1冊にまとめられている。同楽譜は、ディアベッリ社の *Potpourris aus den neuesten und beliebtesten Opern für das Piano-Forte allein von Ant. Diabelli* というシリーズ第46集として出版された。残る3点は、上記の各ポプリを個別に出版した楽譜である(〈第3ポプリ〉はA-Wnには保管されていない)。個別出版されたポプリは、それぞれが *Euterpe. Eine Reihe moderner und vorzüglich beliebter Tonstücke zur Erheiterung in Stunden der Musse* というシリーズの第449~452集として出版された<sup>11)</sup>。同シリーズは、ディアベッリ社のピアノ独奏用の楽譜シリーズとし

て、*Philomele* シリーズと同様に、長年にわたって出版が続けられたものである。合本版と個別版のポプリは表紙だけは異なるが、同じプレート番号を持つ。したがって、ディアベッリが同じ版を再利用したことがわかる。ただし、合本版と個別版のどちらが先に出版されたについて、今回の調査では十分な根拠が得られなかった。

次に、ディアベッリのポプリの様式を考察する。ディアベッリの編曲した4曲のポプリは、先述した通り、3幕構成のオペラ《ハイモン》を4つに分割し、冒頭からの主要なアリアをコンパクトにつなげたものである。第1ポプリの冒頭を譜例3に示す。

**譜例3: ディアベッリ〈オペラ《ハイモンの4人の息子たち》のモチーフに基づく  
(第1ポプリ) 冒頭部分 (出典: A-Wn MS13497-qu.4<sup>o</sup>.46Mus.)**

**ERSTES POTPOURRI**  
nach Motiven der Oper:  
**DIE VIER HAIMONSKINDER. MUSIK von M.W. BALFE.**  
Für das Pianoforte allein von A. Diabelli.  
Wien, bei A. Diabelli und Comp. Graben N<sup>o</sup> 1133.  
(Auf ihr Wachen, habet Acht!)

*MODERATO*

D. & C. N<sup>o</sup> 8119

4小節の導入を経て、No.1アリア "Auf ihr Wachen, haben Acht!"のメロディーが始まる。オペラの楽譜(譜例1)と比較すればわかるように、伴奏形に多少の違いがあるが、ポプリでも主要メロディーはほぼ原型のまま使用されている。これ続いて〈第1ポプリ〉のなかでは、オペラNo.5の五重唱までの主要メロディーが劇の進行に従って呈示される。その際、新たなメロディーが始まる箇所に、対応する歌詞のインチピットが記されている。MGG(1997)の「ポプリ potpourri」の項目で、Ballstaedtはポプリでは「劇における曲の順番は考慮されない」し、「しばしば楽曲構成のために調性も変更させられる」(BALLSTAEDT 1997: 1760)と書いているが、ディアベッリのポプ

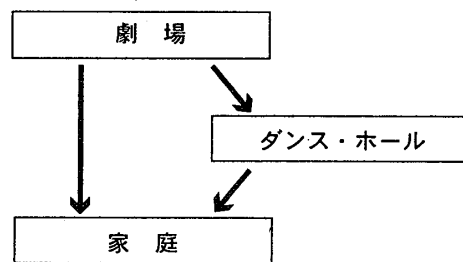
リにおいては、音楽の進行は劇の筋立てに忠実であり、調性も原調が保持されている。それでも、オペラを抜粋してモチーフをつなぎあわせる際に、接続部に編曲者の手加えられることがある。冒頭4小節の序奏もその例である。

## 5. ポプリとカドリーユ

ディアベッリの〈ハイモン・ポプリ〉とヨハン・シュトラウス1世の〈ハイモン・カドリーユ〉には、オペラから引用したモチーフの配置に決定的な違いがある。ディアベッリのポプリでは、モチーフがオペラの筋立てに忠実に配置されているのに対して、〈ハイモン・カドリーユ〉では、モチーフの選抜と楽曲内の配置に作曲家のオリジナリティが認められるからである。つまり、ディアベッリはオペラをピアノ独奏用に編曲したにすぎず、シュトラウスはモチーフを借りながらも、それを再構成する作業を通して独自の作品に作りかえたといえることができる。

19世紀には「ピアノ用オペラ・ポプリの需要は高く、多くの作曲家が一連の作品を生産した」(BALLSTAEDT 1997: 1760)。その種のオペラ・ポプリは、新興の音楽ディレクターが「レコードやCDがない時代に家庭で新作オペラを楽しむためのもっとも人気的手段」であった(ibid: 1760)。ディアベッリは、アマチュアが家庭で新作オペラを演奏できるように、あえて短く簡易なピアノ版に編曲したのである。つまり、ディアベッリのポプリは、図2に示すように、「劇場から家庭」という単純な音楽流通の経路を開いたにすぎない。

図2：19世紀前半のウィーンにおける音楽の流通経路



一方、シュトラウスのカドリーユは、「家庭音楽」を第一義としたものではない。ダンスホールでの演奏を目的に作られた。そこでは、ダンス音楽として再構築されたオーケストラ編成の楽曲がプロの演奏家によって演奏された<sup>12)</sup>。「劇場から家庭へ」という音楽流通の構図に新たな経路が加わり、オペラ・カドリーユを媒体にして、本来ならばまったく別の活動領域である劇場とダンス・ホールが結ばれることで、より広範な音楽活動が展開されることになった。ここで注目すべきは、ダンス・ホールの入場料が劇場の入場料に比べれば廉価であったことである。それゆえ、オペラ・カドリーユは劇場とは無縁の聴衆にも新作オペラを知らしめる結果となった。踊りながら新作オペラのモチーフを体感した人びとが、触発されて劇場に足を運ぶようになり、劇場にとって新しい聴衆の開拓につながった。当然のことながら、シュトラウスのカドリーユも「簡易なピアノ譜」

の形で販売がなされ、オペラのヴォーカル・スコアだけでなく、この楽譜を通じて、人びとは家庭でオペラに親しむことができた訳である。

## 6. 19世紀における2つのタイプのポプリ

ここで、ディアベッリとヨハン・シュトラウス1世の接点について触れておく。《ハイモン》が人気を呼ぶ20年以上前に、ディアベッリとシュトラウス1世には直接的な接触があった。シュトラウス1世が作曲活動を開始したのは、彼がまだランナー Joseph Lanner(1801-43)の楽団に所属する時代であった。楽団長のランナーがディアベッリ社と契約を結んでいた関係上、シュトラウスも当初は同社に自作を供給していた。1820年代、ディアベッリはすでに有能な出版人として商売を拡大していたが、無名のシュトラウス作品を積極的に出版する気配はみられなかった。1828年にまずランナーがディアベッリとの契約を打ち切り、その数ヵ月後にシュトラウスもディアベッリと決別する。その際、彼は律儀にもディアベッリに9月29日付で次のような書簡を送っている。「ハスリンガー氏と契約を結んだので、それがあつた限りは私の作品はすべて彼に届けなければならない」(MILLER 1999: 85)。それに慌てたディアベッリは、自社からOp.5をすでに出版していたにもかかわらず、1829年になって *Täuberln-Walzer* をOp.1として刊行した。「Op.1の作品番号を付したのは、彼[ディアベッリ]が若き音楽監督の最初の出版人であることを知らしめるためであった」(MAILER 2003: 12)<sup>13</sup>。しかし、シュトラウスがディアベッリとの関係を修復することはなかった。その後もディアベッリは手持ちのシュトラウス作品を出版したが、1828年以降に彼とシュトラウスが直接関係した記録は残されていない。

約16年後、ディアベッリは本稿で論じた〈ハイモン・ポプリ〉を出版するが、彼のポプリはオペラを単純に抜粋・編曲した古いタイプのポプリといえる。一方のシュトラウスは生涯に12曲のポプリを作曲した。それらはすべてオーケストラ用の楽曲で、同一作品からではなく、複数の既存曲からモチーフを引用している<sup>14</sup>。しかも、出典は劇場作品ばかりでなく、純粋な器楽作品も多い。1世のポプリに関しては、全作品を詳細に分析した Monika Fink の先行研究がある (FINK 2004 を参照)。彼女は、(1)シュトラウス独自の「ポプリ」の基本構造が存在すること、(2)「ポプリ」において独創的な楽器の使用法ならびにテクスチュアがみられることを指摘した(FINK 2004: 15)<sup>15</sup>。そうであるならば、シュトラウス1世のポプリ作品は、単なる編曲とはいえない<sup>16</sup>。1世のポプリは、「とりわけ巧妙かつ思慮深い引用の選択と配置によって、元来のコンテキストから取り出された楽節を、ある新しい、しかも音楽的に意味のある総合体へと構成し、さらには自立した真作を作り上げることに成功したと理解できる」(FINK 2004: 16)。これ以降のオーケストラや軍楽隊の演奏会においては、「聴衆に馴染みのある諸々の主題を用いることで、30~40分間聴衆の関心をつなぎとめておくことができた」(LAMB 2001: 220)。シュトラウスの作品は、その種の新しいポプリの代表となった。シュトラウスのポプリは、本稿で論じたオペラ・カドリユーと同様に、原曲の演奏場所から家庭へ至る音楽の流通経路の中間に、さらなる発展的な活動領域を介在させた



と認めることができる。

## 7. 結び

本研究では、バルフのオペラ《ハイモンと4人の息子たち》を引用した楽曲を手がかりに、カドリーユとポプリというジャンルについて考察した。ディアベッリのポプリが「オペラの編曲」であったのに対し、Finkの説に従えば、シュトラウス1世はポプリの分野においても独自の作品を創出した。1828年に袂を分かったディアベッリとシュトラウス1世が同じ時代にタイプに異なるポプリを提供したことになる。19世紀にディアベッリはポプリによって、オペラ劇場と家庭音楽を直結させた。しかし、シュトラウス1世は、ポプリやオペラ・カドリーユによって、この構図にダンスホールや演奏会場という別の活動の場も付け加え、原曲を知らない人びとにも音楽の殿堂であるオペラ劇場の音楽や他の作曲家の音楽を身近なものとした。これによってウィーンの音楽文化活動はより複合的になり、より多くの聴衆を巻き込んで活性化していった。

## [注]

- 1) イギリスでは、*The Castle of Aymon, or The Four Brothers* (英訳: G. A. A'Beckett?)として、1844年11月20日にロンドンのプリンセス劇場で上演された。イギリスにおいても、パリと同様、成功を収めることはなかった。
- 2) ケルテン門脇の宮廷劇場で上演するための台本に対する1845年9月23日付の検閲許可書(A-Wn Mus. Hs. 32905. Mus)がオーストリア国立図書館に保存されている。このなかで、*Die vier Haimons-Kinder* と書かれたタイトルの *Kinder* に消し線が引かれ、*Söhne* に書き直されている。
- 3) シュトラウス作品は、息子エドゥアルトがシュトラウス楽団所有の楽譜を大量に焼却処分したため、ピアノ初版譜がもっとも信頼性のある史料である。原題の綴りは、Haslinger社から出版されたピアノ初版譜に従った。
- 4) カドリーユの定義ならびに楽曲構成については若宮 2005 を参照のこと。
- 5) ウィーン市庁舎図書館(A-Wst)に Joh. Strauss 作曲と記された〈オペラ《アンナ・ボレーナ》によるカドリーユ *Quadrille aus der Oper Anna Bolena*〉の手稿パート譜(M.H. 2366)が所蔵されている。この楽曲がシュトラウスの真作であるならば、オペラの上演年代から鑑みて、1845年より以前に作曲されたものと推測される。その場合には、この楽曲がオペラからのすべてのモチーフを引用した最初のカドリーユとなる可能性がある。
- 6) *Stradella-Quadrille* Op.178(1845), *Zigeunerin-Quadrille* Op.191(1846), *Beliebte Quadrille nach Motiven aus Auber's Oper: Des Teufels Antheil* Op.211(1847), *Martha-Quadrille* Op. 215(1847)。オペラの上演時期にあわせて引用楽曲が作られる関係上、他の作曲家との競合は必然性をもつが、上記曲のうち、Op.178を除く3曲で父子が競合する結果になった点は興味深い。
- 7) 調性の変更は、*Pantolon*(D)、*Trénis*(B)、*Pastourelle*(A, B, C, D)にもみられる。

- 8) 《ハイモン》関連の資料は39点所蔵されている。ディアベッリ関連の楽譜のうち、2点は手稿譜である。
- 9) ディアベッリの引退後に初演された《Kéolanthe》(1859)を除き、ウィーンで上演されたバルフ作品のうち、そこから派生した楽曲の所蔵楽譜数は、《愛の泉》1点、《ジプシー娘》4点、《ロシエルの包囲》2点、《Die Rose von Castilien》(1853) 0点である。
- 10) *Philomele* シリーズの全500集すべての楽譜が一箇所に現存する訳ではない。各地の資料情報を収集し、1979年にWeinmannが目録化した*Philomele*(WEINMANN 1979)には、第440集以降に情報のない空白欄もある。そのうちの2つの楽譜(第445、446集)が現在はオーストリア国立図書館に収蔵されていることが判明した。第445集はオペラ No.3: Oliver のための“Romanze”であり、第446集は No.11: Oliver のための“Cavatine”である。
- 11) 個別出版されたポプリの楽譜のうち、A-Wn に現存するのは、*Erstes Potpourri nach Motiven der Oper: Die vier Haimonskinder* (Plate No.5119; A-Wn MS5170-qu<sup>4</sup>.V, 449Mus), *Zweiten Potpourri nach Motiven der Oper: Die vier Haimonskinder* (Plate No.8120; A-Wn MS5517-qu<sup>4</sup>.V, 450Mus), *Viertes Potpourri nach Motiven der Oper: Die vier Haimonskinder* (Plate No. 8122; A-Wn MS5170-qu<sup>4</sup>.VI, 452Mus)。
- 12) エドゥアルト・シュトラウス(1835-1916)がシュトラウス楽団所有の楽譜(一次資料を含む)を大量焼却したため、その後のシュトラウス研究ではやむなくピアノ初版譜に頼らざるを得ない状況にある。しかし、ピアノ初版譜はあくまで二次的な産物である。
- 13) ディアベッリがシュトラウス 1 世の楽譜を最初に出版したことは事実である。1825 年の *Wiener Zeitung* 紙に“Johann Strau: Sieben Walzer für das Pf”という広告が出された。しかし、この楽譜は現存しない。同楽譜が最初の Op.1 であるか否かも判明していない。
- 14) 出典の既存曲には他の作曲家による作品ばかりでなく、自作も含まれる。
- 15) ポプリの基本構造とは、「序奏→引用部分の対比的な並置→フィナーレ風の終結部分」というパターンである(FINK 2004: 15 参照)。
- 16) シュトラウス 2 世は、1887 年から父の全集を編纂・出版した。ここにはオペラ・カドリーユを含む、すべてのカドリーユが収載されたが、ポプリは1曲も収められなかった。この事実は、19 世紀末にシュトラウス 2 世がポプリを父のオリジナル作品と認めていなかったことを示唆する。Fink は、この見解に疑問を呈している(FINK 2004: 16)。

[分析使用楽譜]

BALFE, Michael William

n.d. *Die Vier Haimonskinder: Les Quatre fils de Haimon*. Leipzig: Friedlein & Hirsch. A-Wn :  
M.S.30606-4<sup>o</sup>.39 Mus 所蔵

DIABELLI, Anton

- 1844 *Potpourris aus den neuesten und beliebtesten Opern: Vier Potpourris nach Motiven der Oper: Die vier Haimonskinder von M.W. BALFE.* Wien: Anton Diabelli und Comp. A-Wn: MS13497-qu.4°. 46Mus 所蔵

STRAUSS, Johann

- 1845 *Quadrille über beliebte Motive aus der Oper: Die vier Haimonskinder.* Wien: Tobias Haslingers Witwe und Sohn. A-Wst 所蔵
- 1987 *Strauss, Johann (Vater): Sämtliche Werke in Wiedergabe der Originaldrucke.* HILMAR, Ernst (ed.) Bd. 5. Tutzing: Hans Schneider.

[Library Sigla]

- A-Wn Österreichische Nationalbibliothek, Musiksammlung, Wien, Austria  
A-Wst Wienbibliothek im Rathaus [旧 Stadt- und Landesbibliothek], Wien, Austria

[参考文献]

BALLSTAEDT, Anderas

- 1997 “Potpourri”, in FINSCHER, Ludwig (ed.) *Die Musik in Geschichte und Gegenwart.* 21 Bände. Kassel: Basel: London: New York: Prag: Metzler; Stuttgart: Weimar: Bärenreiter. Sachteil Bd.7: 1759-1761.

BAUER, Anton

- 1955 *Opern und Operetten in Wien.* Graz: Köln: Herman Böhlaus nachf.

BURTON, Nigel; HALLIGAN, Ian D.

- 2001 “Balfe, Michael William”. in SAIDIE, Stanley (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians.* 2<sup>nd</sup> ed. 29 vols. London: Macmillan. Vol.2: 534-538.

FINK, Monika

- 2004 “Die Potpourri-Kompositionen von Johann Strauss Vater”. in *Wiener Bonbons: Zeitschrift der Wiener Johann Strauss-Gesellschaft für Musiker und Musikfreunde.* Wien: Johann Strauss-Gesellschaft. 2004/2:12-16.

HÖSLINGER, Clemens

- 1980 *Musik-Index zur “Wiener Zeitschrift für Kunst, Literatur, Theater und Mode”, 1816-1848.* München: Salzburg: Musikverlag Emil Katzschler.

鍵山(若宮), 由美

- 2006 「M. W. バルフェの〈ボヘミアの少女〉とシュトラウス父子のカドリーユ〈ジプシー娘〉: 19世紀中頃の音楽の流通と伝播に関する一考察」『お茶の水音楽論集』第8号: 30-36.

LAMB, Andrew

- 2001 "Potpourri", in SAIDIE, Stanley (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2<sup>nd</sup> ed. 29 vols. London: Macmillan. Vol.20: 220.
- LOEWENBERG, Alfred
- 1978 *Annals of Opera 1597-1940*. 3<sup>rd</sup> ed. Totowa, New Jersey: Rowman and Littlefield.
- MAILER, Franz
- 1999 *Johann Strauß. Kommentiertes Werkverzeichnis*. Wien: Pichler.
- 2003 *Johann Strauss I. Vol.1. CD の解説書*, Marco Polo 8.225213.
- MILLER, Frank
- 1999 *Johann Strauss Vater: Der musikalische Magier des Wiener Biedermeier*. Eisenburg: Castell-Verlag.
- SCHÖNHERR, Max; REINÖHL, Karl
- 1954 *Johann Strauss Vater*. London: Wien: Zürich: Universal Edition.
- 岡田, 公夫 (訳)
- 1988 『ハイモンの四人の子ら』 in 『ドイツ民衆本の世界5』 東京: 国書刊行会.
- SCHNELL, Dagmar
- 2001 "Diabelli, Anton", in FINSCHER, Ludwig (ed.) *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*. 21 Bände. Kassel: Basel: London: New York: Prag: Metzler: Stuttgart: Weimar: Bärenreiter. Personenteil Bd. 5: 963-966.
- 若宮, 由美
- 2005 「フロートの〈マルタ〉とシュトラウス父子」『埼玉学園大学紀要: 人間学部篇』第5号: 145-157.
- 2006 「オベールの〈悪魔の分け前〉とシュトラウス父子のカドリーユ対決」『埼玉学園大学紀人間学部篇』第6号: 121-133.
- WEINMANN, Alexander
- 1956 *Verzeichnis sämtlicher Werke von Johann Strauß Vater und Sohn*. Wien: Ludwig Krenn.
- 1983 *Verlagsverzeichnis PETER CAPPI und CAPPI & DIABELLI (1816 bis 1824)*. Wien: Ludwig Krenn.
- WEINMANN, Alexander; WARRACK John
- 2001 "Diabelli, Anton", in SAIDIE, Stanley (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2<sup>nd</sup> ed. 29 vols. London: Macmillan. Vol. 7: 279-280.
- WEINMANN, Ignaz; WEINMANN Alexander
- 1979 *Philomele*, Wien: Ludwig Krenn.

かぎやま ゆみ

国立音楽大学卒業、お茶の水女子大学大学院修了。専門は18～19世紀のウィーン音楽。主要論文『ヴァーゲンザイルの序曲と交響曲』の他、『ベートーヴェン大全集』（音楽之友社）、『ヨハン・シュトラウス2世作品目録』（日本ヨハン・シュトラウス協会）、『新編音楽中辞典』（音楽之友社）、『キリスト教辞典』（岩波書店）などの執筆を手がける。埼玉学園大学、東京成徳大学・同短期大学講師。日本ヨハン・シュトラウス協会理事。